

特別連載
Vol.19

1934年 日米野球ユニホーム

いまから80年前の1934年、日米野球にベーブ・ルースら大リーグ選抜チームが来日しました。当時はまだ現在のようなプロ野球は日本にはなく、大学OB等を集めた全日本チームが組織され試合が行われました。

写真の左は全日本チームの主将を務めた久慈次郎氏（早大OB・捕手、1959年殿堂入り）のユニホームで、左胸には全日本“ALL NIPPON”の頭文字であるANのロゴが縫い付けられています。右は大リーグ選抜チームのレフティ・オドール氏（2002年殿堂入り）のユニホームで、左胸には丸型ワッペンが付けられており、光沢のある刺繍で米国旗を图案化したマークに“ALL AMERICANS”と入れられています。両ユニホームとも当博物館で収蔵しています。

11月4日、神宮球場での初戦は東京六大学OB主体の東京倶楽部が対戦、5日の第2戦以降は全日本チームが日本各地で対戦しましたが、16戦全敗と力の差を見せつけられます。ただ、11月20日、静岡草薙球場では当時17歳の沢村栄治投手が力投した0-1での敗戦等もあり、当時の大スターであるルー

スをはじめとする大リーグ選抜との対戦は各地で大きな人気を集め、日本プロ野球誕生の呼び水となりました。

日米野球終了後の12月26日には、全日本チームを中心として「大日本東京野球倶楽部（現在の読売ジャイアンツ）」が結成されました。

翌年12月には「大阪タイガース」が、36年に入ると「名古屋」、「東京セネターズ」、「阪急」、「大東京」、「名古屋金鯱」が次々に誕生し、2月5日、7球団により日本職業野球連盟が設立され、同年からプロ野球公式戦がスタートしました。

